様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４年　５月　６日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2021
課題番号：２０Ｋ２２０４２

研究課題名（和文）多文化・多言語教育の人類学的理論構築と実践に向けて：ボリビアの言語政策を中心に

研究課題名（英文）Toward the anthropological theorization and practice of multicultural and multilingual education: focusing on Bolivian language policy and planning

研究代表者
中野　隆基（Nakano, Ryuki）

明星大学・教育学部・講師

研究者番号：００８８３７２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：成果は主に次の点に集約される。第一に、言語人類学、教育人類学、文化人類学、ラテンアメリカ地域研究を含む幅広い分野の資料の収集・検討により、多文化・多言語教育を多角的かつ地域をまたがる形で検討するための理論的示唆を得ることができた。第二に、文献を通じた検討に留まらず、口頭発表、書籍、論文を通して成果を発表し、フィードバックを得ることができた。第三に、以上を通じて、ボリビア東部低地の異文化間・文化内複言語教育の民族誌的調査から、その調査を行う文化人類学者自身の言語社会化、国内高等教育機関のスペイン語教育に至るまでの過程を記述し理論化する、という今後の研究の方向性を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
昨今の文化人類学における南米低地先住民社会研究では、遠く離れた他者の世界観を強調する存在論的研究が隆盛を極める一方、都市的文脈や具体的なコミュニケーションの文脈自体は軽視される傾向にあった。それに対し本研究は、学校教育における言語への／を通した社会化という視点から、学校という都市的文脈におけるコミュニケーションに埋め込まれた教育的・社会意味を掬い取ることに力点を置いた。さらに、人類学者自身の言語社会化や、フィールドから帰国後の高等教育での教育論と経験的に接続し、包括的に検討した。これにより、フィールド調査・研究と帰国後の教育を相補的に発展させる語学教育・人類学教育の可能性を見出すことができた。

研究成果の概要（英文）：The researcher has obtained the following results. First, through analyzing previous studies on multicultural and multilingual education of various disciplines including linguistic anthropology, educational anthropology, cultural anthropology, and Latin American regional studies, the researcher has gained some theoretical implications from interdisciplinary and interregional perspectives. Secondly, the researcher has published some results of project in oral presentations, a book, and an article. Third, through this process, I have gained some theoretical and methodological insights of theorizing the whole process of the ethnographic research in the field, the language socialization of anthropologists, and the multicultural and multilingual higher education in Japan (at home).

研究分野：文化人類学、言語人類学、教育人類学

キーワード：多文化・多言語主義　言語社会化　学校教育　先住民言語　ラテンアメリカ（南米低地先住民社会）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）文化人類学においてラテンアメリカ地域社会はしばしば、西洋とは異なる異質な「他者」の社会として位置付けられてきた。昨今なら、一つの現実世界(自然、モノ)に対する多様な文化(認識、言語)の存在を前提とする西洋的な多文化主義ではなく、万物に精神が宿るという世界を共有しながらも動物や人間といった多様な自然=身体の存在を前提とする南米先住民の多自然主義を論じた Eduardo Viveiros de Castro の存在論的アプローチがそれである。他方でこのような研究は、周縁社会に生きる遠く離れた他者の世界観を強調する一方、学校教育などの都市的文脈や、具体的なコミュニケーションの文脈自体は軽視する傾向にあると批判されてきた。

（２）本成果報告者は、ボリビア東部低地において、「異文化間・文化内複言語教育」という国家プログラムが、学校教育の教室内で具体的にどのように展開し、学校外の領域とどのような関係を織りなしているのか、特に先住民言語教育に焦点をあて、民族誌的に研究を進めてきた。その過程で、学校の中心的役割でもある「教育」というコミュニケーション自体にこそ、自他関係や社会変化を理解するための鍵があるのではないかと考えるようになった。

２．研究の目的

　本研究の目的は、ボリビア東部低地の異文化間・文化内複言語教育を、主に先住民言語教育実施過程のコミュニケーションに着目しつつ、民族誌的に記述・分析を行うことで、自他関係や社会変化の議論を問い直すことである。しかしながら、本研究の扱う事例はボリビアだけでなく、成果報告者自身の言語社会化や、成果報告者の携わる国内の大学における第二外国語教育など、発展的に拡張していくことになった。

３．研究の方法

（１）本研究は当初、①主にボリビアの異文化間・文化内複言語教育の公的言説の整理・分析、②民族誌的データの収集・分析、③他地域・他分野の文献研究と本研究成果の総合、という三つの調査手法を用いて行う予定であった。

（２）しかしながら、現在まで続く Covid-19 の世界的流行により、当初予定していたボリビアへの渡航が一貫して困難であったため、本研究で重要な位置を占める民族誌的調査を実施することが出来なかった。そのため、渡航困難となる以前の民族誌的データの分析を、収集資料を用いつつ可能な限り進めることで、不足を補うよう努めた。また、研究を進めていくうえで発展した関心に伴い、ボリビアの異文化間文化内複言語教育だけでなく、調査者である自身の言語社会化の過程や、フィールドから帰国後に国内の人類学者が担う主要な教育機会の一つである語学教育の理論化と実践も検討対象に据えることにした。

４．研究成果

（１）書籍の資料収集と検討

　既に手元にある民族誌データとボリビアの公教育の資料分析のための書籍資料(ラテンアメリカ地域研究、異文化間複言語教育、多文化・多言語教育についての教育言語人類学、教育人類学、言語人類学、さらにはその上位ディシプリンである文化人類学に至るまでの幅広い分野の書籍)の収集・整理・検討を行った。Covid-19 の世界的流行により当初予定していた現地調査が一貫して困難であったため、当初の計画を変更し、資料収集にあてた。結果として、最終的には十分な資料収集と今後の研究の見通しを立てることができた。

（２）成果発表や研究者との交流を通したデータの整理・検討

①2020 年 9 月には、第二回社会言語科学会シンポジウム「多声を聴く、他者と生きる―言語から人と経験世界の多様性を問い直す―」（オンライン）にて、ボリビアの異文化間・文化内複言語教育の現状について個人発表を行った。これまで、日本の多文化共生やラテンアメリカの異文化間二言語教育、カナダの多文化主義など、様々な多文化主義的・多言語主義的な公教育や政策が、対立や排除の解消にはつながっていないと指摘されてきた。本発表では、このような状況の中、文化人類学や言語人類学はフィールドで出会う他者の声をいかに受け止め、どのように論じていくのか、主に文化・言語人類学における「翻訳」と「多声性」をめぐる議論の検討と、報告者のフィールドであるボリビア東部低地チキタニア地方におけるベシロ語授業、特にサンタクルス県歌の翻訳と実践の分析を通して報告した。これにより、次のことを明らかにした。①「文

化の翻訳」をめぐるポストモダン人類学のように、「他者の声」を「他者の声」として切り離して受け止め論じることは、不可避に「多声的な」翻訳の秘める豊かさを不可視化する可能性があること。②それゆえに、「翻訳不在の翻訳」と評されたテクストそのものへの着目が不在の文化人類学の翻訳論に（ピム 2010)、差異と類似の比較を伴う政治的・歴史的・言語的プロセスを包括的に視野に入れた言語人類学の翻訳論を参照しつつ、「不在」を取り戻す必要があること。③翻訳の「不在」を取り戻すことにより、フィールドワークを行い「民族誌を書く」という営為をめぐるポストモダン人類学の多声性の議論もまた別の観点から考えうること。以上である。なお、報告者に対するコメントでは、「多」の中で一つ一つ括られていく「声」をどう捉えるかという問題や、より詳細なデータを提示・分析する必要性など、今後の課題を認識することができた。

②2021 年 2 月には、メキシコ国立自治大学の「第 2 回メキシコ・日本国際学術コロキアム」(オンライン開催)の「移動、関連性、共有」と題されたパネルにて、調査のフィールド(ボリビアの異文化間・文化内・複言語教育）とホーム(日本の大学におけるスペイン語教育)を往還してきた自身の言語社会化の過程について、オート・エスノグラフィーの観点から発表を行った。先に述べたように、文化人類学における翻訳論、特に「文化の翻訳」をめぐる議論は「翻訳不在の翻訳」（ピム 2010）と翻訳研究の分野では評されてきた。そこで本発表では、「文化の翻訳」に言語人類学の言語社会化研究のアプローチを導入する際、言語社会化研究で手薄な職場（報告者のケースでは、国内の高等教育における第二外国語としてのスペイン語教育）というフィールドへのアプローチを補うため、自身の今までの個人的経験を文化的経験と関連付けつつ記述・分析するというオート・エスノグラフィーの手法を組み合わせ（Ellis, Adams, and Bochner 2011)、フィールド調査と帰国後の高等教育における第二外国語教育までの自身の経験を再帰的に報告・分析した。発表では、①先行研究が国内の英語教科書の談話分析で指摘するように（榎本 2009)、国内の英語教育では国際市場における競争力や普遍的価値を伴うグローバルな人的資源が目指される一方で、アジア出身者以外はみな英語での会話が展開されるなど、新自由主義的価値観が再帰的に見出されうること、②調査対象であるボリビアの先住民言語政策における言語変種間の対立との遭遇から、報告者が帰国後に担うことになった、大学における第二外国語としてのスペイン語教育にスペイン語内部の多様性をいかに導入するかに関心を抱くに至った経緯などを報告・分析した。同じパネルの他の発表者は、メキシコから日本への留学生の移動についての発表や、日本とメキシコの大学間で行われるオンラインにおけるテレタンデムの分析についての発表を行ったため、上記の発表の視点に加え、人類学者以外の人の移動、Covid-19 における科学技術や異文化コミュニケーションのありようやその関連性など、本研究の教育的実践においても有意義な視点を得ることができた。

③2021 年 11 月には、個人発表として、明星大学全学共通教育委員会第 3 回研究会「クロッシング」にて、国内・学内の大学論・語学教育論を踏まえつつ、第二外国語としてのスペイン語教育の理論的検討を行った。2022 年 3 月には、国内の多文化・多言語教育、多文化共生、人類学的翻訳論などの議論を参照しつつ、異文化理解に向けた学問としてスペイン語教育を多角的・理論的に検討する論文を刊行した。論文では、近年の国内における第二外国語としてのスペイン語教育の展開をまとめたうえで、英語教育と第二外国語の橋渡しを提案する議論や（藤原 2017)、複数の言語教育・複数の教科・複数の教育実践の連携を主張した議論を参照しつつ（平高 2013)、より包括的なスペイン語教育の実践方法を検討した。そのうえで、人類学的翻訳論に基づく批判的な語学教育の視点を提案し、国内の多言語・多文化政策の背後にある多文化共生という視点や、事前計画と調査結果のズレを重視する「曲線的な」（松村 2019, 2020）学びの重要性を、学内の全学的な教養教育を担う所属機関のコンセプト「つなぐ学び」との関連から指摘した。質疑応答では、国内の教養教育の位置付けが学内の課程・組織の再編の歴史と深く関連していることの指摘や、発表者が行ってきたボリビアのチキタニア地方における先住民言語政策や国内の語学教育において、文化・言語がステレオタイプ的に提示され、また言語に内在する歴史的・政治的側面が欠如しがちであることへの気付きなど、本研究の今後の方向性について非常に有意義なやりとりがなされた。今後は本研究で得られた知見を活かしつつ、民族誌的調査から国内の高等教育機関における多文化・多言語教育を通した社会化に至る一連の過程を人類学的に理論化し、教育実践としても活かす方法を引き続き探っていきたい。

＜参考文献＞

Ellis, Carolyn, Adams, Tony E., & Bochner, Arthur P. (2011). Autoethnography: An overview. *Historical Social Research / Historische Sozialforschung* 36(4): 273-290.

榎本剛士(2009)「第 3 章　英語教科書登場人物とは誰か？：『教育』と『コミュニケーション』のイデオロギー的交点」綾部保志（編）・綾部保志・小山亘・榎本剛士（著）『言語人類学から見た英語教育』、pp. 195-241、ひつじ書房。

ピム、アンソニー（武田珂代子 訳）(2010)『翻訳理論の探究』みすず書房。

藤原愛 (2017)「外国語教育の展望：英語からその他の外国語学習へ」『明星大学研究紀要』53(1): 95-106。

平高史也(2013)「ウェルフェア・リングイスティクスから見た言語教育(<特集>ウエルフェア・

リングイスティクスにつながる実践的言語・コミュニケーション研究)」『社会言語科学』16(1)：6-21。
松村圭一郎（2019)『これからの大学』春秋社。
松村圭一郎（2020)『はみだしの人類学：ともに生きる方法』NHK 出版。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 中野隆基	４．巻 4
２．論文標題 第二外国語としてのスペイン語教育に関する理論的基盤の検討 ： 異文化理解に向けた包括的・分野横断的な語学教育の体制構築と実践に向けて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 明星大学全学共通教育研究紀要	６．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 中野隆基
２．発表標題 「多声的」な翻訳という営為：ボリビアの異文化間・文化内・複言語教育（EIIP）におけるベシロ語授業を事例に
３．学会等名 第二回社会言語科学会シンポジウム
４．発表年 2020年

１．発表者名 Ryuki Nakano
２．発表標題 Language socialization in the field (Bolivia) and at home (Japan): An autoethnographic commentary on learning and teaching languages across contexts
３．学会等名 2nd International Colloquium of Mexican and Japanese Studies “Distance, Interconnectedness and Sharing”（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中野隆基
２．発表標題 第二外国語としてのスペイン語教育に関する理論的基盤の検討 ： 異文化理解に向けた包括的・分野横断的な語学教育の体制構築と実践に向けて
３．学会等名 明星大学全学共通教育委員会第3回「研究会・クロッシング」
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

1．著者名 中野隆基（ラテンアメリカ文化事典編集委員会編）	4．発行年 2021年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 148-149（総頁780）
3．書名 「アイマラ」『ラテンアメリカ文化事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関